

帯金式甲冑と鏡の副葬

Obigane-shiki Armor and Mirrors as Grave Goods

上野祥史

UENO Yoshifumi

はじめに

- ①鏡と甲冑の生産動向
- ②甲冑と鏡の共伴状況
- ③三角縁神獸鏡と帯金式甲冑の副葬
- ④地域における帯金革綴式甲冑と保有鏡の副葬
- ⑤帯金式甲冑と保有鏡の副葬を通してみる古墳時代中期

おわりに

【論文要旨】

古墳出土の副葬品には、王権からの配布と地域での副葬という二つの異なる側面がある。配布と副葬は、王権と地域という異なる視点で古墳時代社会を評価したものともいえよう。本論では甲冑と鏡が共伴する現象に注目し、帯金式甲冑を副葬した古墳時代中期の地域の動きを評価した。

甲冑と鏡の生産段階を整理し、古墳における組合せ関係に注目することによって、帯金革綴式甲冑を副葬する段階には、保有鏡を副葬する動きが鮮明になることを指摘した。保有鏡の副葬が、比較的普遍性をもっていたことが明らかになったのである。こうした現象の背景について、三角縁神獸鏡との関係や地域の古墳築造という視点から検討を進めた。

三角縁神獸鏡は、同範鏡によって生産段階＝配布段階の同時性が保証された器物である。甲冑と三角縁神獸鏡の共伴関係は、帯金革綴式甲冑の副葬を境に大きく変容する。新しい甲冑に古い鏡が組合うこの現象は、帯金革綴式甲冑を副葬する段階で鮮明となった保有鏡副葬の実態をより端的に示していることが明らかになった。

地域という視点では、造営形態の異なる古墳群を取り上げ、古墳築造という視点から帯金革綴式甲冑と鏡の共伴関係について検討した。保有から副葬へという動きは、保有鏡の実態や前後に継続する古墳造営の有無など、それぞれの地域の事情を反映して多様な形態があることを示した。

こうした帯金革綴式甲冑の副葬を通して鮮明となる保有鏡の実態は、古墳時代中期前半という時代を象徴する一面である。一方、比較的普遍性をもった保有鏡の存在は、副葬品が王権の配布したものであると同時に、地域の保有するものでもあることを改めて強調する。古墳の副葬品を検討する視点として、王権と地域という視点の違いを改めて認識することの重要性を指摘した。

【キーワード】 帯金革綴式甲冑、中国鏡、倭鏡、三角縁神獸鏡、保有鏡、地域社会